

祈りの絆

連盟の被災地支援に関する情報は、連盟ホームページをご覧ください。<http://www.bapren.jp/>

お祈りください

1. 福島第一原発燃料棒取り出し作業が事故なく進みますように。
2. 作業員の方がたの健康が支えられますように。
3. 仮設住宅の方がたの生活が守られ、心身共に支えられますように。次の住まいが確保されますように。
4. 雪が多い東北での支援を継続している現地の教会の働きと安全が守られますように。

遠野ボランティアセンター

11月19日より23日まで今年最後の西南学院大学のチーム（13名）が来ていただきました。小雪が時々舞う日もあり、各部屋にストーブを入れても十分な暖はとれず、九州から来た学生たちにとっては、とても寒かったことでしょう。3日間で6ヶ所の仮設団地の支援。朝早くから出かけ、夕方暗くなるまでの支援。クリスマスのリースを作ったり、パンケーキを焼いたり、ふくろうの形をしたハサミ入れを作る支援をしていただきました。

学生たちは初めて見る被災地の様子に戸惑い、たくさんの方が亡くなられた大槌町役場、釜石市の防災センターに立ち、言葉を失い、そこに貼られていたご遺族のお手紙に涙し、大槌町の全貌が見える城山公園で立ち尽くし、やっとたどり着いた仮設の方がたとの出会いで必死になって笑顔を作り出し、3日間よく働いていただきました。今回のメンバーは、今までのメンバーと少し様子が違い、なんだかゆったりとした学生たちで、急いだり走ったりはしません。仮設に行くと、皆さんの手を握って離さず、思わず「帰るよ！」と注意するもあわてる様子もありません。でも、手を握られた方がたは、満面の笑顔と涙で「ありがとな」といつまでも学生たちに手を振って見送っていただきました。その様子を見ながら、私自身が「寄り添うこと」の一番大事な点を忘れかけていることに気づかされました。耳を傾けること、心を動かすこと…はっとさせられた瞬間でした。



パンケーキ作り



フクロウのはさみ入れ クリスマスリース

大槌町の様子

大槌町は今あちこちに盛り土が積まれています。地震による地盤沈下で1.5m沈下した町全体を、平均2.2mかさ上げしなければなりません。地盤沈下で土が沈み込むことを想定して倍の盛り土をして固めるそうです。赤浜は6mの盛り土の予定とのこと。大槌町の区画整備事業に伴う盛り土で必要とされる土砂は約86万立方メートル（大槌町HPによる）です。盛り土に使う土が足りないこと、また、復興住宅建築予定の大槌中学校校庭から基準値に対して7倍の有害物質が検出されたため、土の入れ替えが必要となり復興住宅の完成が最低でも8ヶ月ほど遅れるそうです。思うように復興が進まない中で、今も寒い仮設住宅に住むことを余儀なくされている方がたを覚えてお祈りください。

2013年最後の支援

12月17日から19日は今年最後の支援としてクリスマス会を計画いたしました。山形教会から7人、横浜JOY教会から2人、ボランティアに参加していただきました。横浜JOYのメンバーは大きなリースを3セット用意していただき、山形教会の皆さんはクッキーや手作りハンドクリームを準備していただき、全国の諸教会、伝道所から送っていただいたカイロと一緒にクリスマスプレゼントの袋に詰めて配布していただきました。大槌第8仮設、小槌第4仮設、第7仮設の3箇所でクリスマスのメッセージをおこない、皆さんと一緒にクリスマスの賛美歌を歌うことができ、感謝で一杯になりました。3年目の冬、あの震災からずっと諸教会の皆さんのお祈りとボランティアとしての積み重ねが、キリスト教と仮設の方がたの垣根を取り除いてくださっているのだと思います。本当にありがとうございました。なお、遠野ボランティアセンターは1月と2月水道管凍結等のため支援活動はお休みいたします。



東日本大震災被災地支援委員会原発課題班コラム 「国策って何だろう？」^⑬

今年の正月に親戚がブラジルから来日して楽しい交わりの時を過ごしました。77才になる叔父は今から50年あまり昔にブラジルへ移民として移住しました。苦勞の連続の中でようやく今の生活を営むことが出来るようになり、家族は彼の地で根を張り、たくましく生きています。そんな叔父が私は大好きです。戦前満州に渡り、敗戦後、命からがら引き上げてきた私の妻の祖父母とその家族は、故郷の奄美が米軍占領下であったため、開拓民として宮崎県えびのに入植します。ようやく生活の目処が立ち始めた頃、その開墾地が自衛隊の演習場として強制収用される事となりました。その頃「夢のような国策」として推奨されていたのが「移民」でした。しかしブラジルに渡った叔父を待っていたのは、荒れた大地と奴隷のような過酷な労働環境でした。「送り出すだけ送り出してあとは何も方策のない、それは国家による『棄民』の歴史であった」と叔父は語っています。日本という国家は明治以来、様々な場面で「棄民」の歴史を繰り返してきました。そしてそこには必ず「国策」という怪しげな言葉が伴ってきたのです。日本がひた走ってきた原子力政策もまた「夢のような国策」と言われてきました。私は国や県の役人たちが何度もこの「国策」という言葉を口にするのを聞いてきました。けれども一体誰のための何のための「策」だったのでしょか。私たちはフクシマの事故と、多くの人々や動植物や大地や海の被った、今も、そしてこれから何十年も継続し続けるであろう甚大な被害を思うとき、また、その被害をきちんと見つめ、補償しようとはしない電力会社や、国の在り方を考える時、再び「棄民」という言葉を思い起こすのです。私たちがきちんと見るべきものは何か考えさせられます。

「わたしは、わが名によって偽りを預言する預言者たちが、『わたしは夢を見た、夢を見た』と言うのを聞いた。」（エレミヤ書23章25節）。

原発課題班 野中宏樹

2013年度募金目標額（一般募金）：2,000万円

〈2013年4月1日から12月31日現在〉

1,217万円（国外からの225万円を含む） **目標に対する不足額783万円**

※上記一般募金の他、指定募金（原発課題等）として325万円が寄せられました。

引き続き被災地支援を覚え募金にご協力ください。

〈振替〉00140-9-180881 宗教法人日本バプテスト連盟総務部